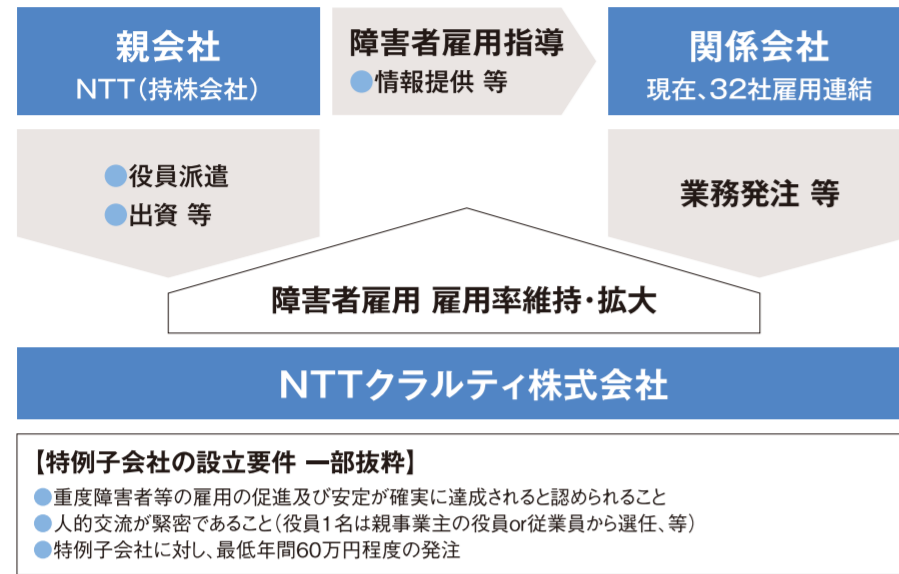


特例子会社の果たす役割について

図①:特例子会社と関係会社の関係について



図②:特例認定会社

親会社	日本電信電話株式会社	
関連会社	東日本電信電話株式会社グループ 21社	NTTロジスコ
	NTTアド	NTTアドバンステクノロジ
	NTTエレクトロニクス	NTTソフトウェア
	NTT都市開発	NTTビジネスアソシエ
	NTTヒューマンソリューションズ	NTTラーニングシステムズ
	NTTファイナンス	NTTレゾナント
	計32社	

NTTクラリティ商品紹介



塩山から、お届けします。

塩山ファクトリーから、2014年カレンダー、メモカード、ペーパーペンをお届けします。お客様へのノベルティとして、あるいはそれぞれのオフィスでの自分使用としてすでにご好評いただいているカレンダーに、メモカードと紙ペンが加わりました。電話連絡などに重宝するメモカードと、紙のぬくもりが嬉しいペンも合わせて、ぜひお買い求めください。

- 価格
①カレンダー 1500円 ②ペーパーペン 150円 ③メモカード 150円

● お問い合わせ
NTTクラリティ 経営企画部 総務担当 吉岡・前田
TEL:0422-50-8345
MAIL:toiawase@ntt-claruty.co.jp

全国に350社以上ある特例子会社。私達NTTクラリティもその特例子会社の1つです。皆さんに、特例子会社とはどんな会社かをお聞きすると「何かが特別なのだろうけど、詳しくはわからない」と大半の方が答えるだろうと思います。

そこで今回は、特例子会社設立のメリットとその果たす役割についてお話します。

現在、事業主には総従業員数比2.0%以上の障がい者を雇用する義務(法定雇用率)があります(現在、雇用義務があるのは身体障がい者、知的障がい者、2018年には精神障がい者も義務化)。

この法定雇用率を守れない企業は障害者雇用納付金を納めることになり、さらに、厚生労働省の指導を受けても改善が見られない企業については企業名を公表されてしまう事もあります。

既存の会社が障がい者を雇用する際、設備を始めとする職場環境に配慮すべき点が多く、既存の会社がその条件を満たした職場環境を構築することが困難なケースが多くあります。そこで、大きな役割を果たすのが特例子会社です。

親会社(NTT)が障がい者の就労に必要な配慮をした子会社(NTTクラリティ)を設立し、一定の要件を満たす場合には(参照:図①特例子会社の設立要件)、特例としてその子会社に雇用されている労働者を親会社に雇用されているものとみなして、法定雇用率を算定することが出来ます。

また、NTTグループの関係各社(参照:図②)は、特例子会社を含め、グループとして実雇用率を算定することが可能になります。

特例子会社の設立により、障がい特性に配慮した業務の確保と職場環境の整備が進み、その結果、障がい者の能力を十全に引き出すことが可能となります。さらに、NTTグループとして法定雇用率を算定できるため、雇用率の維持・向上が図りやすくなります。

障がい当事者にとっては、障がい者に配慮された職場環境の中で、個々人が持つ能力を最大限発揮する機会に恵まれ、安定的な雇用と就労機会の拡大につながります。

また、特例子会社が障がい者を雇用し蓄積したノウハウを親会社や関係各社に提供することによって、更なる雇用を生み出すことが可能となり、NTTグループ全体で企業の社会的責任を果たすことが出来ます。



迷惑をかけることも障がい者の「仕事」。

対談 渡辺一史(フリーライター) × 千葉美幸(NTTクラリティ)

渡辺一史さんは、2003年に発表した『こんな夜更けにバナナかよ』で、筋ジストロフィー患者・鹿野靖明さんと、彼を支えるボランティアたちとのむき出しの人間関係を描いた。障がい者は人に「迷惑」をかけながら生き続けるほかはないのか。しかしそれは本当に「迷惑」なのか。鹿野さんと同じ筋ジストロフィーを患う、NTTクラリティの千葉美幸が、渡辺さんにうかがった。

千葉 もう10年ほど前になるでしょうか、渡辺さんのお書きになった『こんな夜更けにバナナかよ』(北海道新聞社)を出版直後に読んで、とても考えさせられたんです。私もこの本に登場する鹿野靖明さんと同じ筋ジストロフィーを患っているんですね。私は本が書かれた時の鹿野さんよりも、人に助けってもらわずに自分でできることが多いんですけど、ゆくゆくは鹿野さんのようになってしまいうらやましく不安な時期があって。その時にこの本を読んで「自分はどう生きていけばいいのかな」みたいなことをすごく考えさせられ

たんです。それで今日お会いして、いろいろお話を聞かせていただきたいと思います。

渡辺 それはありがとうございます。出版から10年たって、今千葉さんは、社会に出ていらっしゃいますけど、今の自分の体験と、この本とが重なる部分はありますか？

千葉 今、通勤に片道一時間半かかるんですね、バス、電車、バスと乗り継いで。バスに乗る時は、運転手さんをお願いしないと乗ることができないんです。それに、乗れたとしても、座席を確保するために、乗っているお客さんに席を譲っていただかなければいけない。毎朝、電車は電車で、駅員さんにお願いをして乗せてもらって、降りるときも手伝いをしてもらわないといけない。バスでは雨の日なんかは「ちょっと混んでいるから、次のバスにしてください」ということもしばしばあります。それに、私が乗るたびにバスが2-3分止まってしまいます。朝は特に急いでいるお客さんが多い中で、その2-3分って大きい。どうしても人のお世話になったり、迷惑がかかってしまう。それをどう考えたらいいのかな。

渡辺 千葉さんが同じバスに毎朝乗ることは、運転手さ

んもお客さんもわかっているんですよ。それでも他のお客さんは迷惑に思ったり、イライラしているんですか？

千葉 直接になかを言われたことはないです。私がそのように受け取っているだけなのかもしれません。あ、でも、一度だけ「なんで席を譲らなければいけないの」って言われたことがあります。9年通勤している間、たった一度だけ。

渡辺 その時はどうしたの？

千葉 それは私にはではなく、運転手さんに対してなんですけど。いつも運転手さんが「席を譲ってもらえますか」ってお



客さんに言ってくれるんです。その運転手さんに対して、「なんで席を譲らなければいけないの」って。その時は運転手さんが親切で「すみませんが協力お願いします」って言うんですけど、その人はしぶしぶ、という感じで後ろの席に移って。

渡辺 そのことをどう考えればよかったと思いますか？

千葉 難しいですね…。その時はやっぱり言われてもしかたないって言うか、そういう風に思う人もいらっしゃるって





思いました。ある程度「迷惑に思う人もいるだろうな」って思って通勤しているところもあるので。むしろ言われる機会が少ない、くらいに思っています。

渡辺 それで翌朝、もう仕事に行きたくないっていう気持ちになったことはない？

千葉 そうですね。私はもともと働きたいっていう気持ちが強かったんです。今、NTTクラリティで働いているんですけど、就職活動をする中で、「筋ジストロフィー」っていう病名だけはよく知られていて、そうすると筋ジスのイメージができていって、進行性の病気で、動けなくなってっいう。NTTクラリティに採用される前に何社か受けたんですけど、やっぱり面接で「筋ジスですよ」、「進行性ですよ」と言われるんです。で不採用になってしまう。もちろん、大部分の会社は、それが理由とは言わないんですけど、でも必ず面接で聞かれましたし、ある会社には、はっきりと言われました。「能力的には大丈夫かもしれないけど、ちょっと病気がね」って。

渡辺 さっきのバスの問題もそうだけど、そういう不理解に対してはどうしていけばいいと思いますか？ あるいは、この本に描かれていた鹿野さんなら、どう考えただろうと思いますか？ 私は当事者ではないので、当事者である千葉さんに向かってこうしなさい、とは言えない。もちろん、鹿野さんと2年4か月間ずっと取材をしてきた中で感じたことはあるんですけど、どうですか？ 千葉さんはどういう思いでそこをクリアしているんですか？

千葉 一番感じるのは「知らない」ってことでしょうか。筋ジスにも型があって、それぞれに重さや進行のスピードが違うこととか。「知らないからしょうがない」って思っています。

渡辺 でも、そういう不理解にさらされてめげちゃったり、明日からもう通勤したくない、っていう人もいるよね。そういう人に対して、千葉さんはどういうことを言ってあげますか？

千葉 うーん、どうだろう。私は就職に苦労してやっと今の会社が採用してくれたという思いがあるので、通勤のこととかも「それくらいのこと」っていう思いがあって、あまり気にしていない部分もあるんです。

渡辺 『こんな夜更けにバナナかよ』の文庫版では、脚本家の山田太一さんに解説をお願いしたんです。その山田太一さんの有名なテレビドラマで、40代以上の障がい者の方はみなさんよく知ってると思うんですけど、昭和54年、1979年にNHKで「男たちの旅路」シリーズというドラマをやっていました。その中の一本に『車輪の一步』という作品があるんですが、これは車イスの人たちが登場するドラマなんです。山田さんが脚本、主演は鶴田浩二さん。そのドラマの中で、障がい者に向かって鶴田浩二さんが語りかける場面があって、そのセリフをちょっと読みます。

一步外へ出れば、電車に乗るのも、少ない石段を上るのも、誰かの世話にならなければならない。迷惑をかけまい、とすれば外に出ることが出来なくなる。だったら迷惑をかけてもいいんじゃないか？ 勿論、いやがらせの迷惑はいかん。しかし、ぎりぎりの迷惑はかけてもいいんじゃないか。かけなければ、いけないんじゃないか。

私はこのドラマを観て本当に感動して。私が取材の中で出会った障がい者の何人かは、これを見て自立を決意した、っていうくらいドラマなんです。

『こんな夜更けにバナナかよ』には我妻武さんという鹿野さんの友達が登場するんだけど、おぼえているかな。

千葉 はい。名前が出てきたのをおぼえています。

渡辺 鹿野さんは、最初は内気だったそうです。内気な人にありがちな負けず嫌いで目立ちたがり屋だったっていうのが鹿野さんの性格なんだけど、そんな鹿野さんが自立していく上ですごく大きかったのは我妻武さんっていう人の存在なんです。すごく頭がよくて、車イスんだけど女の子にモテて、その我妻さんと若い頃に出会ったっていうのがすごく大きくて、我妻さんに映画に連れていってもらったり、エッチなお店に連れていってもらったり(笑)、いろいろしながら鹿野さんは少しずつ外に出ることに慣れていった。



当時は「ハリアフリー」っていう言葉もなかったし、映画を観に行くにも階段が目の前にあって自力で上がれない、そんな時代だったんだけど、我妻さんは通行人に「僕たちを上まで上げていってください」と、臆することなく声をかけて。鹿野さんはビクビクしてただけど、そんな鹿野さんに向かって我妻さんが「かけていい迷惑をかけていくのは俺たちの仕事なんだよ」って言う場面があるのね。これは我妻さんがさっきの山田さんのドラマを見て、我妻さんなりに工夫して使っていた言葉。かけていい迷惑をかけていくのは自分たち障がい者の仕事なんだ、っていう。

だから千葉さんも、もちろん会社でする仕事もあるんだろうけど、毎朝バスに乗るっていうことが、もしかしら社会のため、あるいは障がい者の理解のためにすごく大きな仕事になっているのかもしれない。

千葉 それについて思い当たることがあります。入社したての9年前は、会社までに乗るバスの3分の2くらいがノンステップバスじゃなくて、階段のバスだったんです。だから選ばないとバスに乗れなかったんです。でも今、全部のバスがノンステップバスになって、待たなくても乗れるようになったんです。

渡辺 それはなぜだろう？ って考えたら、やっぱり千葉さんのような人たちが町に出てきたからですよ。

千葉 はい、それは感じました。

渡辺 それは、実は障がい者のためだけではなく、ベビーカーで子どもを連れてくるお母さんだったり、あるいは高齢者のためにもなっているよね。大きな目で見れば、障がい者の人たちは町に出てくるだけで、大きな仕事をしているんじゃないか。そんな捉え方をすると、たとえばちょっとめげそうになったときも「これが自分の仕事かもしれない」と思って頑張れるんじゃないか。

今札幌の地下鉄は、全部の駅にエレベーターがついているんですよ。昔は全くついていなかった。これは「こんな夜更けにバナナかよ」の中にも登場する「札幌いちご会」という障がい者団体が1980年代から率先して運動した結果なんです。

今ではエレベーターがついているのが当たり前で、エレベーターにお年寄りやベビーカーのお母さんたちが、われ先にと乗り込んでくる(笑)。でもそれは、なぜそうなの、って考えたら、障がい者の人たちが運動した結果なんです。

千葉さんのような人たちががんばって努力して、めげないで外に出て行くことで、健康者と呼ばれる人たちもメリットを享受できるような社会の方向に進んでいるということはすごく大事なことで、私は思います。

千葉 わかりました。

渡辺 そのことを私なりの言葉で表現したのが、この本の最後の部分です。

どんな人でも例外なく歳をとり、やがていつか病を患うように、私もまた遅かれ早かれ彼らの側に行くのだから。

こう閉じています。「将来の私」のために、障がい者の人たちが今つらい思いをし、格闘していると考えられるかどうか。つまり障がい者が生きやすい社会を作っていくことは、実は社会全体の利益になるっていう考え方を、どういう言葉で、そのことを全く知らない人の心に訴えていけるかというのは大事で、私もこの本や、その後の取材や執筆を通じて伝えようとしていることです。そしてそれは、私自身のためでもあるんです。

『こんな夜更けにバナナかよ』／渡辺一史著(文春文庫)
筋ジス患者・鹿野靖明さんと、彼を支援するボランティアとの関係性を綴ったルポルタージュ。夜中に突然バナナを食べたいと言い出し、一本ならず平然と二本目を要求する鹿野さんへの、あるボランティアの心の叫びがタイトルの由来。「助けてもら」障がい者、「助けてあげる」支援者という従来の枠組みを揺さぶり、支援のあり方や障害と社会との関係性を問い直す一冊。

渡辺一史(わたなべかずみ)
フリーライター。名古屋生まれ、大阪府豊中市育ち。北海道大学文学部中退。北海道を拠点にフリーライターとして活動する。2003年、筋ジストロフィー患者の鹿野靖明さんとボランティアを描いたルポ「こんな夜更けにバナナかよ」を刊行、第25回講談社ノンフィクション賞、第35回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。2011年に刊行した2冊目の著書「北の無人駅から」で第34回サントリー学芸賞を受賞。

千葉美幸(ちばみゆき)
NTTクラリティ経営企画部。岩手県出身。小学校の時に筋ジストロフィーとの診断を受ける。高校卒業後、上京。埼玉の職業訓練校を経て、2005年4月にNTTクラリティ入社。現在経理業務を担当。

毎日おなじ。
だけど
毎日新しい。

日々成長するメンバーとスタッフ



【事業所紹介】NTTクラリティ 塩山ファクトリー

NTTクラリティ塩山ファクトリーは山梨県甲州市塩山、JR塩山駅からほど近いところにあります。2011年6月設立、比較的历史が新しい塩山ファクトリーは、知的障がい者を採用している事業所です。

事業内容は、製紙工場などで出た紙バックをリサイクルした紙漉きと印刷。牛乳やお酒などの紙バックを印刷する際に出る規格外製品を引き取り、フィルムなどの外装を剥ぎ、砕いて水に溶かしたものを手で漉き、紙を作っています。できあがった紙に印刷して、カレンダーやメモ帳なども作ります。

設立当初は28人だったメンバーも今は36人に増え、所長と4人のリーダーで運営しています。メンバーは10代から60代まで様々な年齢で構成されています。見ていると、お互いに声を掛け合いながらスムーズに仕事を進めていて、一体感の強さを感じます。

また意外な才能の持ち主が多いことも塩山ファクトリーにとめるメンバーの特徴で、たとえば障がい者フィギュアスケートで活躍する人や、フライングディスクの山梨代表、あるいは障がい者の弁論大会で賞をとったメンバーもいます。

リーダーの一人、高橋さんは、ご自身の息子さんが

自閉症ということもあり、「もっといろいろな人に関わりたい」と、スタッフに応募したそうです。「知的障がいの人たちはあまり成長をしない、と聞いていましたが、そんなことはありませんでした」と高橋さん。2年間でできなかったことも結びが、ある日突然できるようになったメンバーがいるそうです。「何がきっかけかわからないけど、確かに彼らは成長しています。彼らにできないことはないんだ、と感じています」。仕事のやりがいについて「外から見ていると毎日同じ、単調なことの繰り返しに見えるかもしれませんが、でもメンバーは一人ひとり、その日一日を新鮮に楽しんでいるんです。それが伝わるから、私もやりがいを感じます」と話してくれました。

所長をつとめる村上さんは「メンバーの目線に立つことが大事」と、メンバーと一緒に毎日立ち仕事や力仕事をしています。「そうすることで、彼らの体調や気持ちの変化をつかむことができ、サポートが必要なことに気がつくのです」と言います。

NTTクラリティにとって初めての試みとなる知的障がい者の事業所運営。塩山ファクトリーでは、メンバーもスタッフも一緒になって、日々ゆっくりと、しかししっかりと成長する毎日を送っていました。